



よろづたすけのおつとめ



教祖誕生祭に向け、台湾からも37名がおぢば帰り

真 朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

このつとめなんの事やとをもっている
よろづたすけのもよふばかりを 二号 9
このつとめなんの事やとをもっている
せかいをさめてたすけばかりを 四号 93

私たちは、親神様から身体をお借りし、絶え間ない御守護によつて生かされています。しかし、その御守護を頭で分かっている、普段生活をしていると、つい感謝の心を忘れてしまうこともあるでしょう。毎日感謝と喜びをもつて暮らすことを心掛けるためには、日頃からおつとめを勤めることが大切です。

教会に足を運んで神前に額づき、うれしいこともつらいことも、すべて親神様、教祖に申し上げる。その中で、温かい親心を感じたり、解決への糸口が思い浮かんだり、心が落ち着き、勇み心が湧いてくる。自らの信仰を見つめ直し、「天の定規」に沿って自分の心を真っすぐ神様に向ける。そして心のほこりを払い、澄み切った誠の心で勇んでおつとめを勤めるとき、親神様はその真実をお受け取りくださり、どんな御守護をも下さるのです。

おつとめは、私たちの身上・事情だけでなく、世の中の治まりから自然の恵みまで、陽気ぐらしへ向けてありとあらゆる御守護を下さる「よろづたすけ」のおつとめ。私たちが勤めるおてふり、鳴物、お歌の一つひとつが「よろづたすけ」に繋がっているのです。

正面四方

ずいぶん前、修養科教養掛を勤めたとき、ある日の夕づとめ後、身上の修養科生におさづけを取り次いだ。

三度三度の3回を、うっかり4回取り次いでしまったが、そのまま済ませた。

あくる朝用があり、朝づとめ後の取り次ぎを他の教養掛に頼んだ。登校前、取り次がれた本人が筆者に言った。

「今朝の先生は2回しか取り次いでくれなかった。昨夕先生は4回だったので、神様は帳尻を合わせてくださったのですね」と。

余れば返す、足らねば貰う。平均勘定はちゃんと付く。明治25年1月13日と教えられる。

また、この世は一分の隙もない理詰めの世界ともお教えいただいている。我々各々今ある姿も、大なり小なり平均勘定の付いた姿かもしれない。

《4月月次祭 挨拶》

成ってくる姿は

すべて親神様のお計らい

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、教祖百四十年祭の御用の上に、ご丹精くださいまして、誠にご苦勞様です。この月の18日には、ご本部で教祖誕生祭が執り行われますが、その理を受けて、教祖の御誕生日を寿ぎ申し上げつつ、大教会4月の月次祭を心うれしく、陽気に勤めましたことは、大変ありがたい次第です。今月はブラジルから1名、台湾から37名の方がおぢば帰りをしてくださり、こうして大教会の月次祭にも参拝してくださっています。本当にはるばるご参拝くださり、大変ご苦勞様です。この機会に思うところをお話して、月次祭の挨拶にしたいと思います。

さて、先ほど、毛利敬子さんと高馬陽子さんのお二人に感話をしていたきました。お聞きになった皆さん方も、信仰の励みになったことだと思います。このお二方に共通していることは、成ってきたことの受け止め方であり、思案の仕方だと思います。

人生には、楽しくうれしいこともあれば、一方ではつらく厳しい出来事もありますが、どんなことが起こっても、それは「親神様が私にとって一番いいようにしてくださっているんだ」と受け止めることができれば、たとえそれがつらい節であっても、節の中にある親神様の親心に気付くことができ、喜ぶことができます。この喜びが次に繋がっていくのです。論達に、「成ってくる姿

はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいである」と示されるように、節から芽が出る御守護を頂くのです。

毛利さんは、実家のご両親、殊にお母さんの「お道は切つたらあかん、繋がらないかん。続いてこそ道や」という信仰の影響を受けて成長されたようです。思春期真っ盛りの高校生の頃に、両親は教会のある神戸へ、兄弟4人は大阪と、家族が離れ離れになった時期はしんどい思いをしたと思いますが、振り返れば、これも父親をお道に繋いでくださった御守護だと喜んでおられます。こうした受け止め方ができるのがお道の信仰です。今は子供さんに信仰を繋ぐ努力をしつつ、所属教会の御用に、また大教会や詰所でのひのきしんに勇んで励んでくださっています。

高馬さんは、最初のお子さんの死産という、実に厳しくつらい節に遭遇されましたが、さまざまな葛藤を乗り越えて、「子供の出生しは夫婦にとって、そして子供にとっても大きな御守護であったと心底思えた、ありがたかった」と受け止めておられます。こうした思案が次に繋がっています。これをきっかけに布教の家に入り、1年間を心づくりと、にいがけに努めたことが、現在の教会長夫人としての御用に生かされています。これも節から芽が出る御守護だと思います。「成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいである」との、このお言葉を改めて胸に刻ませていただいた今月の感話でした。

さて、1月から行っている「おやさど伏せ込みひのきしん」ですが、5月は25日と26日に、芦津から分離した5つの大教会の方と共に、眞明組としてひのきしんを実施します。26日は通常通りの祭典終了直後のひのきしんになります。25日は午後1時から2時まで、豊田山墓地の除草清掃のひのきしんをさせていただきます。

きます。豊田山墓地は神殿から離れていることもあって、ここをひのきしん現場に選ぶ教会はほとんどありません。そんなこともあって、うつかりいたしますと、春から夏にかけて雑草が背丈ほど鬱蒼^{うつそう}と生い茂ることもあります。ここを眞明組でさせていたかどうかということ。あまり皆が気に掛けない、人目に付かない場所でのひのきしんを、あえてさせていただくことが陰の徳積みになるように思います。このひのきしんは、目には見えない土の中に種を埋める伏せ込みになります。その種はいずれ芽を出します。ありがたいことです。

5 月は気候もよく、25 日は日曜日でもありますから、教友同士が誘い合って、また家族をお連れして、新しい人もお連れして、どうか楽しんでご参加をください。また、別席者の丹精にも絶好の日でありますから、午前席を運ぶことができますし、午後席にお連れすれば、別席をお聞きいただいている時間にひのきしんができます。どうかこの日をにいがけ、おたすけと丹精にも大いに活用していただきたいと思います。

明後日の 18 日は、教祖には 27 回目の御誕生日をお迎え遊ばされ、その翌日には婦人会総会が開催されます。どうか、この喜びの日この喜びの旬におちばに足を運ばせていただいて、教祖の御誕生日を心からお祝い申し上げたいと思います。当日おちばへ帰れない人も、同じ思いでおちばに心を向ける日にしていただきたいと思います。そして、皆が心を合わせて、明るく勇んで年祭活動を進め抜かせていただくことを、御存命の教祖にお誓いさせていただきますでしょう。

皆さん方のなお一層勇んだ時旬の道の歩みをお願いして、ご挨拶と致します。

(要約)

立教百八十八年 四月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、世界一れつをたすけて陽気ぐらし世界を実現したいとの深い思召から、尊き魂のいんねんある教祖をよろにこの世の表にお現れ下さり、この世の元初まりの真実を説き明かして、真にたすかる道をお啓き下さいました。爾来、自由のお働きのまに／＼数々の結構な理を随所にお現し下さいまして、今日の成人の姿へとお導き下さいます親心の程は、誠に有難き極みでございます。私共は、片時も御厚恩を忘れることなく、感謝と喜びを心に湛えて時旬の御用に勤しませて頂いておりますが、その中にもこの月の十八日は、教祖には二百二十七回目の御誕生日をお迎え遊ばされ、ご本部にて教祖誕生祭をお勤め下さいますので、その理に倣い、お許しを頂きました今日の芽出度き日に、教祖の御誕生日を心から寿ぎ申し上げ、只今から役目にあずかる者一同、慶びの心を一つに、座りづとめ、陽気てをどりを勤めて、四月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、国内はもとより海外からも芦津の道の子達が参き集い、勇み心も一入に、鳴物の調べに合わせておうたを唱和して、つとめに勇む状を御覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、教祖のひながたの道に思いを致して、これを素直に辿らせて頂き、御存命の教祖の同伴をさせて頂いて、たすけ一条に心勇んで励ませて頂きたいと存じます。そして、教祖百四十年祭を目指して、年祭活動に一生懸命に全力で取り組ませて頂きまして、大恩ある教祖にお報いをさせて頂きたいと決心を致しております。何卒、この心定めをお受け取り下さいまして、教会長、ようぼくの赴くところ、おたすけと丹精の上には不思議やかな御守護を賜り、嬉しい理を各地でお見せ下さいまして、教祖の御教えが一日も早く世界隅々にまで布き渡りますようお願いの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《4月月次祭 感話》

縦の伝道はこどもおぢばがえりから

東大屋分教会 毛利敬子



月次祭でのおさづけ

昨年の11月、大教会の月次祭の祭典終了後におさづけの申し込みをしました。奥へ案内されて待っている、そこに現れたのは、大教会長様でした。ただただ恐縮しながら、大教会長様におさづけを取り次いでいただきました。

おさづけが終わった後、大教会長様が、「お手引きやなあ。実は毛利さんに御用を頼もうと思っただ」とおっしゃったのです。その

御用が、この度の感話のことでした。なぜ私が？ いろいろなことを思いましたが、あの場でお断りをさせてもらう勇気もなく、お受けさせていただきました。

そもそも、なぜ私がおさづけを取り次いでいたかと思っただかという、その頃の私は、身体の調子があまり良くなり、頭や足に痺れもあったので、病院でいろいろと検査をしていたでいる最中でした。何か大きな病気だったかどうかという先案じをしてしまい、精神的にもともしんどい状態でした。家族や東大屋分教会の会長さんには、ずいぶん心配を掛けたことと思います。

続いてこそ道やで

私は主人と結婚して、東大屋分

教会所属となりましたが、結婚前は兵神大教会の天浦分教会の所属でした。天理大学で主人と知り合いましたが、それまでは、大阪で両親と4人の兄弟姉妹で暮らしておりました。

父は信仰初代で、仕事場の同僚から天理教の話を聞いて教えに感銘し、入信しました。母は信仰二代目で、祖父が親戚から、にをいを掛けていただいたことにより入信したと聞いています。

そんな2人が天浦分教会で出会って結婚をし、4人の子供をもうけ、お道を信仰していました。私が幼少の頃の両親のイメージは、父は無口で温厚。母はおしゃべり好きでチャキチャキ母ちゃんといった感じでした。夫婦仲が悪いという印象はなかったのですが、どういう訳か、私が小学3年生のときに、父が突然蒸発をしました。急にいなくなつたのです。元気だった母は一気に心を病んでしまいました。

数カ月後に父は戻ってきて、また家族で生活をするようになりました。

したが、信仰に関しては、母と私たち子供だけがなんとか教会に繋がっている状態でした。

そして、私が高校生とき、父が肺の身上で在宅酸素が必要な状態となり、日常生活を送るのが困難になりました。それにより精神的に弱かつた母はうつ状態となり、我が家は八方ふさがりとなりました。

そんなとき、天浦分教会から父と母に「教会に帰っておいで」と声を掛けていただき、両親は教会に住み込ませていただくことになりました。両親は神戸、私たち兄弟姉妹は大阪と、家族は離れ離れになりましたが、父が身上になったことから、父が再び教会に繋がらせていただけたことは、今振り返っても、本当にありがたいことだったと思います。

母は私たちによく「お道は絶対に切ったらあかん。続いてこそ道やで。細くてもいいから長く繋がってくれるのは天理教やで」と、ことあるたびに、信仰を繋ぐことを伝

えてくれていました。両親とも苦
労の多い人生だったと思いますが、
それが台となって、私たち子供に
信仰の大切さを教えてくれたと、
今では、感謝の思いでいっぱい
です。

両親の苦勞、特に母親の、しつ
かり神様に繋がる、子供たちのた
めに徳を積む。そして、一生懸命
教会に伏せ込むという信念が、子
供たちの運命をつくり、幸せの種
まきになるという母の信仰を、受
け継いでいこうと心に誓って毎日
を通していただいております。

こどもおぢばがえりのおかげで

私自身も気付けば、3人の子ど
もの親となり、子供たちそれぞれ
一人ひとりに信仰を繋いでいくこ
との重要さと難しさを、日々感じ
ています。おかげさまで、3人と
もようばくとならせていただき、
お道の行事には都合を合わせて参
加してくれることが多く、それは
とてもうれしくありがたいことと
思っています。

そのように子供たちが抵抗なく、

お道の行事に参加してくれている
のは、間違いなく夏の「こどもお
ぢばがえり」のおかげだと私は思
っています。

毎年参加しているこどもおぢば
がえりは、我が家にとって夏のメ
インイベントになっています。天
理に住んでいるため、友達もた
くさん誘わせてもらうことができ、
どんなテーマパークや行楽行事よ
りも楽しませてもらっていたと思
います。

とはいえ、たくさんの子供たち
を引率する中では、子供同士のも
め事やけがなどもあり、私たち自
身が反省させられることしばし
ばですが、会長さんを中心にスタ
ッフ皆が、なんとか子供たちに楽
しんでもらいたいという思いで毎
年努めさせてもらっています。

今では、こどもおぢばがえりに
参加してくれていた子がスタッフ
として参加してくれたり、自分の
子供を連れて親子で参加してくれ
たりするようにもなりました。ま
た、その中から別席を運んでくれ
る子も出てくるなど、改めて、夏

のこどもおぢばがえりが子供たち
に与える影響力の大きさを実感し
ています。

そして、今日、そのような喜び
の姿を見せていただけているのは、
ひとえに、一昨年出直された、東
大屋分教会の八木幹雄会長さん
のおかげだと思っています。

幹雄会長さんは少年会育成、特
に夏のこどもおぢばがえりにはと
ても力を入れておられました。教
会のある長崎からのこどもおぢば
がえりに参加することは、費用に
おいても労力においても本当に大
変だったと思います。

それでも、毎年欠かさず教会を
挙げてこどもおぢばがえりに力を



注いでおられました。教会がこど
もおぢばがえりをしてくださるお
かげで、私たちも友達を誘って毎
年参加させてもらうことができました。

そして子供たちは楽しいこども
おぢばがえりを通して、1年、ま
た1年と、信仰の楽しさを知らず
知らずの内に学ばせてもらってい
たのだと思います。

声は肥

こどもおぢばがえりに限らず、
お道には、人を育てるためのた
くさんの行事があります。

長男が高校1年生のときに、私
は夏の「学生生徒修養会・高校の
部」の参加を勧めました。ですが、
部活で参加するのは難しいと言
いましたので、幹雄会長さんにその
旨を伝えると、後にも先にもこの
ときだけは、幹雄会長さんが、直
接長男に電話で学修の参加を強く
勧めてくださいました。

長男も、珍しく会長さんが言う
ので、ダメ元で部活の顧問の先生
に申し出てみると、先生が「それ

はどういったことをするのか？」と聞かれるので、「全国から高校生がたくさん集まって天理教の勉強をします」と答えると、「全国から若者がたくさん集まるとは、貴重な経験になるだろうから、部活を休んで行ってきたい」と承諾してくださいました。

そして、3年間、毎年学修に参加させてもらうことができ、たくさんのお道の仲間と出会い、本当に楽しく尊い体験をさせていたことができました。

次男は学修高校の部には1度も参加せず、大学生になり、信仰からも少し距離をとるようになり、親として本当に心配をしました。

そんな中、幹雄会長さんの突然の出直しという節を受け、次男の気持ちに変化があったのか、昨年の大学3年生のときに、半ば強制的ではありましたが、初めて学修大学の部に参加しました。

そこで同世代の教友からたくさん刺激を受け、自分自身の信仰と向き合う機会を得ることができ、次男の信仰に対する態度が変わっ

ていきました。それ以降は、学生会や青年会などの行事にもすんなりと参加するようになりました。これらを通して感じたのは、どんなときも、まずは声を掛けることが大事だということでした。

時には嫌な顔をされたり、言うことを聞いてくれないことも多々ありますが、聞こうが聞こまいが声は肥。子供たちの肥やしになると思つて声を掛け続ける中に、神様がその子に応じたタイミングをピタツと合わせてくださるんだと思いました。

いろいろな行事に参加させてもらうことにより、たくさんの方々が、子供たちを導いてくださることはとても心強く、ありがたいことと思わせていただきます。そしてやはり何よりも子供たちの信仰の軸をつくつてくださった幹雄会長さんには感謝の思いでいっぱいです。

喜ばしてもらいましょう

一昨年、幹雄会長さんは急性心筋梗塞で、54歳という若さで直

されました。

危篤状態の2日間、誰もが回復を信じて一心にお願いをさせてもらいましたが、図らずも、お出直しなさいました。私はこんなことがあっていいのかと震えました。

しかし、教会の子供さんたちは、またまうつしと告別式の途中、ずっと、周囲の方々にお礼の言葉を掛け続けていました。告別式では、教会の長女であるさくらちゃんが「お父さんへ」と書いた手紙を読みあげました。その中に、「お父さんが言つてた、御守護の数を数えることは、絶対忘れないよ」とありました。こんなに悲しく辛いときに、それでも、その中にある御守護を見つけたして感謝を実践している教会の子供さんたちの姿を見て、幹雄会長さんの信仰が、しっかりと子供さんたちに引き継がれていると思いました。

そして子供さんたちは、幹雄会長さんの後を継いで会長に就任された、母親である香織会長さんを盛り立て、私たちを引っ張つてくれています。香織会長さんは、い

つも私に「喜ばしてもらいましょう」と声を掛けてくれます。つい先案じをして、喜ぶことが苦手な私は、会長さんが、「喜ばしてもらいましょう」と声を掛けてくださることで、その都度、自分の癖性分を省みて、心をつくり直す機会を与えてもらっています。

さて、大教会長様よりおさづけを取り次いでいただいたその後ですが、病院でいろいろと検査していただいた結果、どこにも異常がありませんでした。

とはいえ、その後も痺れは相変わらずあったのですが、この度のこの感話の御用に悪戦苦闘している間に、気付けば身体の痺れがほとんどなくなっていました。

本当に、大教会の御用は、有り難く勿体ないことと思わせていただくとともに、改めて月次祭の日のおさづけというのは、尊いのだと思わせていただきました。

お身体の具合の良くない方がおられましたら、是非おさづけの申し込みをお勧めいたします。

親の声は命 この道は親に尽くす道

浪華浦分教会 高馬陽子



私は、17年前に結婚して、主人と共に稗島分教会へ住み込ませていただきました。

生活にも慣れ始めた頃に、子供を授かっていることが分かりました。我が家にとっては初孫でしたので、両親をはじめ、たくさんの方々が喜んでくださいました。しかし、妊娠4カ月目に入った頃から、ときどき腹痛があり、とてもつわりがひどく、体重が約10kgも減り、切迫流産で入院することになりました。

1週間ぐらいの入院と説明を受

けたときには、たくさん寝れるなぐらいの軽い気持ちでしたが、1週間が経った頃に、今までにない激しい腹痛に襲われ、炎症数値が異常に高く、また少量ずつですが破水していることが分かりました。稗島や自教会ではお願いづとめを勤めてくださり、稗島の奥様がすぐにおさづけを取り次ぎに駆けつけてくださいました。

退院できるとホッとしていたところに、このような節をいただいたて、「なんでだろう、何がいけなかったのだろう」と自問自答の繰り返しだった私に、奥様は「今はなぜと思うかもしれないけど、いつか神様がなぜこのようになさったのか分かる日が来るから、とにかく今はしっかり神様にもたれなさい」と話してくださいました。検査をしても炎症の原因が分か

らないので、まずは夫婦で神様にもたれて、自分たちに何ができるかを考え、おつとめしかないのと思いつから、身動きが取れないベッドの上で寝たまま片手だけで一日に何度も十二下りを勤めました。また、ない中でも精いっぱい運ばせていただきました。

このとき、神様をお願いしたのは、子供をたすけてほしいではなく、子供にとって、また私たちにとって一番いいようにしてくださいということでした。

無事に生まれることを願って

とにかく炎症を抑えないと破水が止まらない。破水が止まらないと赤ちゃんがたすからないということで、病院の先生もあの手この手を尽くしてください、何とか妊娠22週まで持ち堪えました。

22週を超えると小児科が介入できるの、赤ちゃんが一人の人間として認められるそうです。それからNICUのある病院に移り、先生から「1週間後、帝王切開で赤ちゃんを出します」と説明を受

けましたが、子宮の中にはうみがたまっていて、帝王切開も危険が伴う大変な手術になるということでした。

何とか普通に出産させていたいただきたいと親神様、教祖にお願いしたところ、その日の夜に突然、完全破水しました。今日、明日中に生まれるかもしれないと言われ、怖い気持ちと、赤ちゃんに会えるうれしさとありがたさが入り混じった気持ちになりました。ただ、「赤ちゃんは90%ダメだと思ってください。何とか生きられたとしても、重度の障害が残る覚悟をしてください」と言われました。とにかく、無事に生まれてきてくれることだけを願い、をびやの御供を頂き、神様をお願いしました。結局、次の日には陣痛は治まり、それから1週間のうちに激しい陣痛を2回繰り返しましたが、先生から「あと2、3日しても生まれないときは帝王切開します」と言われたその日の夜に、重い腹痛に襲われました。そこから約3時間、分娩台上がって約15分で出産す

ることができました。

後から聞いた話ですが、実はこのとき、赤ちゃんの心拍が弱まり、ほとんど止まっていたそうです。それからすぐに赤ちゃんは小児科の先生が処置してくれましたが、破水した時期が早すぎたことと、完全破水から時間が経っていたこと、また肺がまだ出来上がっていないこともあり、自分で呼吸することができず、生まれてから約2時間後に出直しました。

出直しを通して

そのときは本当につらくて、自分のせいだと自分を責めてばかりいました。子供が出直してからというものの、子供のことを考えては毎日泣いてばかりいました。

そんなとき、ふと入院前にある人に「陽子ちゃんの笑った顔あまり見たことないなあ」と言われたことを思い出しました。そういえば、妊娠が分かってから本当に不足の多い毎日で、そのことについて主人とたびたび話し合い、何事も喜んでさせていたかどうかと言わ

れていたにも関わらず、自分の心を変えることができませんでした。

しかし、この節からたくさんのお守りを感じました。まず、本当は流産になるところを一人の人としてこの世に生まれたこと。出産後、再び心臓が動き出し、主人も生きている子供と出会い、その子供を抱くことができたこと。そして4日後には退院でき、出産1週間後に行われた稗島分教会創立110周年記念祭でおつとめ衣を着て上段に上がらせてもらうことができたこと。2カ月間ずっと寝たきりの状態でしたので、本当に奇跡としかいいようがありません。そうして、こういうことが御守護であると感じられるような私になることができたのです。

そして何よりも、子供が出直したことは、私たちにとっても子供にとっても大きな御守護なのだと思います。お道では親が子となり、子が親となる深い縁で結ばれていて、子供は霊様だと聞かせていただきます。その子供が生まれてすぐに「出直すとい

うことは、きっと安心して私たちの元へ戻ってこれなかったのだろう。なかなか親の思いが分からず、思いに沿うことができない私に、こうした大きな節をお与えいただいたのだと思います。

この節を通して、霊様をはじめ、親々にお喜びいただくことが大切であり、そのためには何事も教祖の思いに沿い、教祖ならばどうされるかを考え、実行することが大切だと思います。

布教の家での出会い

その後、出直した子供が少しでも早く私たちの元へ帰って来てくれるように夫婦で心定めをし、また高馬の父のたつての希望もあり、主人は布教の家大阪寮へ、私は兵庫寮へ入寮しました。

私が入寮した年の兵庫寮は、若い女性が9人で、友達と過ごすような感覚で楽しくスタートしました。入寮して2日目から、にいがけも始まり、どんなふうにするかいいのかわからず、緊張したのを覚えています。

そんな中、あるお宅で若い女性にお会いし、何回か訪ねるうちに、その女性が妊娠していることが分かりました。とてもつわりが重く、あまり動けない様子でしたので、おさづけに通うようになりました。

布教の家に入寮してすぐに自分の経験した境遇と同じような方と出会い、先生からは、「子供を亡くしたあなたにお与えいただいた大切な人だから一生懸命通わせていただきます。にをいが掛つても掛からなくてもいい。すべては教祖がしてくださること。教祖とそ

の人の通り道をつくらせてもらいなさい」とお話を頂きました。布教の家にいる間に、いろいろな先生方に同じようなことを聞かれました。それは「にをいがけは話を聞いてもらえなくていい。草むらを踏み続けたら道ができるのと同じで、その人の家まで何度も草を踏んで道をつくるために行く。こちらが行く道もできるが、相手がこちらへ来てくれる道もできる。とにかく何回も何回もしつこくし

ぶとく歩くように」という言葉で

す。このお話を聞いて、私は実家の祖母を思い出しました。

私が小さいときから祖母は病気で入退院を繰り返しており、信者さんの所にも自分で行くことができないので、いつもお手紙を書いて送っていました。自由に動けなくても、手紙を書くことで自分ができるにいがけ、おたすけをして、教祖と信者さんたちの架け橋をつくっていたのだと気付きました。どんな状態であっても自分ができることがあるのだなと思わせていただきました。

周りへの心配り

最初 9 人でスタートした寮生活でしたが、次第に寝込む子が増えていきました。原因は心の病でした。入寮して 2 カ月目には、入寮当初から情緒不安定になることが多かった子が自宅に戻りました。

スタートしてすぐにこのような節を見せていただき、「精神の身上は本人ではなく、周りが変わらなければいけない身上。皆で心一つに合わせおたすけさせていた

だくように」と言われました。その子と心は繋いでおきたいということ、みんなで毎日手紙を書いて、送って本人の負担にならないようにとの思いから、書いた手紙は毎日お供えをして、お願いづつめをさせていただきました。

また、その後も 1 人、2 人と精神的にしんどくなり、寝込む人が増えていきました。

寝込む子たちに元気になってほしいと思う反面、ずっと寝てばかり、こちらの負担ばかり増えていくと不足に思う日もありました。

しかし、同じ寮で暮らす仲間。

「見るもんねん、聞くもんねん」仲間の道をわが事と思い、できる限り寄り添い、一緒に悩み、共に過ごしました。成人の遅い私たちに、外のおたすけだけでなく内々のおたすけをすることで成人を促してくださっているのだなと思いました。

この一年は、にをいがけだけでなく、人のために心を使わせていただく、おたすけをするための心づくりの一年だったように思いま

す。

これから私が歩む道

神島の会長様からは、「別席者ができなくてもいい。今は理づくり、伏せ込みの時期。初心を思い出し、流されることなく毎日しっかりと歩きなさい」とお話しいただきました。このお話は私たち夫婦にとって、今でも毎日を過ごす上で大切にしています。

現在 4 人の子供をお与えいただき、毎日バタバタとした日々を過ごしていますが、買い物、帰りの道、子供たちの用事の後などの隙間時間に、理づくり、伏せ込みだと思いい、自分たちにできる方法で歩かせていただいています。

最近では子供の友達や同級生に、なかなか学校に行けない、行けてもクラスに入れない子が増えていきます。もちろん本人はともつらい思いをしていますが、それを支えるお母さん方がとても苦しんでいる姿をよく見かけます。そんなお母さんのお話を聞くことが自分にできる身近なおたすけと思い、

周りへの心配りを忘れず通らせていただきたいと思います。

こうして結婚当初、また布教の家での 1 年を振り返ってみますと、親の声を素直に聞かせていただき、分かんずとも素直に実行することがとても大事だと思っています。

「親の声は命。この道は親に尽くす道」、布教の家で何度も言われた言葉です。どんなときでも親が喜んでくださることを考え、素直に「はい」と言える心にならせていただきたい。また草を踏み続けたら道ができるお話を、常に心に置いて、今やっていることは何一つ無駄なことはない、今できることをやらせていただこうと思いい、日通らせていただいています。

そして浪華浦に繋がる方々にも、この道が素晴らしい教えだと思っただけでなく、また、喜びの多い毎日を通っていただけのように、まずは自らが日々喜びを探して、教会の台となるよう勇んで通らせていただきたいと思います。

喜びの奉告祭

靛部属・徳修分教会（徳島県徳島市）は、5月4日、大教会長をお迎えして、井内豊明・四代会長就任奉告祭を執り行つた。

午前10時30分より、井内会長の祭文奏上に続いて、大教会長が挨拶。「この教会が、陽気ぐらしの手本となるように、皆で心を寄せ合つて、来ただけで心が明るくなるような教会を目指してほしい」と激励された。

さらに井内佐津・二代会長と、4年前に出直した井内弘・前会長に対して、長年の丹精に敬意を表された。

おつとめの後、挨拶に立った井内会長は、「3年前に修養科を志願した際、おちばでの朝夕のおつとめや、詰所での生活を通して、心の向きが変わつた。この度、教会長の理のお許しを戴き、本当にありがたい」と御礼を申し上げ、さらに、「先人先輩方の思いを受け継

いで、勇んで勤めさせていただきます」と決意表明した。
その後の祝宴では、ビンゴ大会などで楽しい一時を過ごした。
参拝者は、45名であった。



四月月次祭 祭典役割															
胡 三 琴 味 線 弓			小 太 拍 ち す り 子 ゃ が ね 鼓 木 ン 笛			地 方		て を ど り		扨 者		扨 者		祭 主	
井 望 瀧 筒 月 本 ち 恵 基 ぐ さ 美 志 枝			山 奥 竹 湯 山 奥 田 田 内 川 本 田 道 正 義 正 義 眞 弘 徳 忠 罔 範 治			加 守 瀧 世 田 本 田 清 眞 洋 一 二 郎		中 前 会 今 井 大 村 会 長 川 筒 教 美 長 夫 政 敏 会 津 夫 人 治 成 長 代 人 人 人 人 長		座 り つ と め		瀧 本 庄 司		大 教 会 長	
松 宗 山 森 我 田 明 邦 秀 美 代 子			立 梶 石 葭 中 奥 花 川 川 内 村 田 善 和 健 俊 正 三 隆 郎 浩 和 儀			河 吉 岩 端 田 切 芳 裕 正 雄 和 義		梶 吉 岡 樋 西 川 川 田 本 川 本 畑 り 幸 た 泰 義 澄 よ 子 ね 士 之 博 子 子 子 子 子 子		前 半		賛 者		指 図 方	
梶 瀧 岩 川 本 切 正 美 治 美 奈 代			宗 望 新 西 吉 梶 我 月 居 本 田 川 道 慶 里 興 裕 和 明 太 実 正 樹 人			瀧 村 今 本 田 川 亘 光 聖 伸 一		中 木 浜 榎 川 湯 村 村 田 川 畑 川 々 理 千 康 正 正 代 恵 代 紀 博 信		後 半		瀧 本 一 太 郎		井 筒 文 夫	
高 川 田 山 北 宗 梶 望 梶 馬 畑 中 本 島 我 川 月 川 和 丈 俊 敏 義 久 道 芳 慶 人 典 一 行 彦 嗣 明 征 太			瀧 本 眞 二 郎		獻 饌 長										

婦人会第107回総会

支部の集い

4月19日、本部中庭を主会場に「婦人会第107回総会」が開催された。

この総会に向けては、「総会の会員がおちばへ 人を誘っておちばへ」とのスローガンのもと、婦人会員が積極的に声を掛けて人を誘い、総会に参加するように促されていた。

この日は土曜日ということもあり、国内外を問わず約3万5千人の婦人会員がおちばへに帰り集った。



総会式典では、中山はるえ

婦人会長様が告辞の中で、「一人ひとりが陽気ぐらしへと向かう一役を担っている。この

素晴らしい教えを、一人でも多くの人に伝えていただきたい」とお話しくださった。

また真柱様からは「徳分を生かして、これから道を通る方の育成、丹精に励んでいただきたい」とのメッセージを頂き、

婦人会員は心新たに、年祭活動仕上げる年の充実を誓い合った。

◇ ◇ ◇

本部での式典後は、各詰所で「支部の集い」を開催。

婦人会芦津支部（井筒年子

支部長）は、詰所2階大広間5階会議室、1階食堂で昼食の時間に、これまでの婦人会活動の様子をプロジェクトで放映した（写真上）。

また18日夕方からは模擬店「キッチンほっこり」を食堂で開催。玉こんにゃく、ポテトサラダ、揚げたこ焼きなど、バラエティに富んだメニュー



で帰参者を喜ばせた（写真右）。

19日の午後からは「あしつカフェ」を開催。女子青年が作成したプリンやプチケーキも振る舞われた。また、両日にわたって食堂廊下でバザーを開催。多方面から持ち寄られた衣類などが並べられ、大変な盛況となった。

この日、おちばに帰り集った帰参者は約1千名であった。

◇ ◇ ◇

芦津女子青年（井筒たつえ委員長）は、教祖にお誕生ケーキをお献じしようと17日午後からケーキを作成。パティシエの荒木めぐみさん（恵庭

分教会）を中心に華やかなケーキを作り、お献じをさせていただいた（写真左）。

井筒委員長は、「今年も荒木さんから、スイーツ作りの豆知識などを教わりながら、みんなで協力して作りました。どんなケーキが出来上がって行くのを見て、ワクワクが止まらず、とても楽しいケーキ作りになりました」と感想を語った。



新入生歓迎会

学生会

芦津学生会（河合大洋委員長）は、4月27日、毎月実施



している「学生参拝デー」に合わせ、午後から「新入生歓迎会」を開催。高校生、大学生、専門学校生、計10名が参加した。

午前11時、北礼拝場に集合した学生たちは、三殿を礼拝した後、西回廊で回廊拭きひのきしん。続いてご本部のお願いづとめに参拝した。

その後、詰所へ移動し、新入生歓迎会を実施した。大広間でたこ焼きパーティー。新たに学生会に加わったメンバーと自己紹介を交えながら、楽しい時間を過ごした。

会長室報

本部勤務

〔運営課〕

井筒いつみ（直 轄）

〔炊事課〕

井筒 真彦（直 轄）

専修科生

竹内 大樹（稗 島）

教務部報

教人資格講習会第150回修了

吉田 香織（芦 東）

立教188年4月10日

おさづけの理拝戴《3月》

岩切 直大（四ツ山）

吉田 大樹（今津原）

中打木 小春（吹 田）

中打木 陸（吹 田）

佐藤いずみ（有 家）

畠山 奈々葉（芦 玉）

菊池 孝二（和 鎮）

木村 春陽（芦明徳）

村嶋 隆男（紀 内）

林 理音（山城谷）

林 恵理奈（山城谷）

〔拝戴日順 11名〕

初席《3月》

〔2名〕津峰、紀周

〔1名〕南向、高 清、東 俱

〔順序運びより 7名〕

登殿参列《4月》

山田 尚夫（加島港）

高岡 有子（東 向）

山本 繁正（白 地）

杉下 順子（北 地）

元木久美子（徳 上）

小角 房子（東協町）

梅本 理弘（紀 志）

吉田 道治（紀野本）

岡 秀人（紀 船）

高瀬 一郎（荊田町）

森山 理夫（菅大熊）

以上11名

訃 報

眞一分教会四代会長（尼崎部属）

谷上正子さん



令和7年3月28日、出直された。享年94歳。

告別式は4月1日、西本義之・尼崎分教会長斎主のもと、兵庫県尼崎市内の会館で執り行われた。

昭和5年兵庫県川辺郡で父

・池永正一、母・カナのもとに生まれ、25年尼崎市立第二高等女学校卒業、27年おさづけの理拝戴、29年谷上正信氏と結婚、39年修養科第28期修了、48年教人登録、同年眞一分教会四代会長に就任、平成10年辞任。

大教会では詰員、修養科教養掛を務められた。上級・尼崎分教会へも眞実の限りを尽くし、支えられた。

上郡分教会三代会長夫人（吉野川部属）

大西明代さん

令和7年4月18日、出直された。享年61歳。

昭和38年徳島県三好市で生まれ、57年徳島県立辻高校卒業、59年おさづけの理拝戴、同年修養科第519期修了、大西視郎・三代会長と結婚後は、会長夫人として教会を内で支え続けられた。明るく人柄で周囲から慕われ、多くのよう



告別式は4月21日、宗我道明・吉野川分教会長斎主のもと、徳島県三好郡の葬祭場で執り行われた。

昭和38年徳島県三好市で生まれ、57年徳島県立辻高校卒業、59年おさづけの理拝戴、同年修養科第519期修了、大西視郎・三代会長と結婚後は、会長夫人として教会を内で支え続けられた。明るく人柄で周囲から慕われ、多くのよう

よく、信者を導かれた。

項 目	初 席	のお理さづけ	修養科修了	教 人
大 教 会 (1)	9	5		
東 津 (13)	2	2	1	
吉 野 (23)	1	2	1	
島 川 (29)	1	5		
日 原 (16)	1	2		
稗 島 (15)				1
本 津 (7)				
日 高 (2)				
始 良 (2)				
津 和 (5)	2			
門 司 (12)		1		1
當 別 (6)	1			
大 島 (26)	1	1		
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)				
四 山 (5)		1		
大 冠 (2)				
島 下 (1)				
天 保 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)				
天 津 (1)	1			
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	3			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫 眞 洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)		1		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)		1		
眞 明 彰 化 (2)				
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	22	21	2	2

月 例 統 計（自令和7年1月1日～至令和7年3月31日）